

# 旧甲子園ホテル (武庫川女子大学甲子園会館)

Former Koshien Hotel

## 学舎となって 現代に威容を受け継ぐ旧ホテル

兵庫県西宮市の旧甲子園ホテルは、近代建築の巨匠、フランク・ロイド・ライトの愛弟子、遠藤 新<sup>あらた</sup>の設計で昭和5(1930)年に竣工した。「ライト式」に日本的な意匠を加味した壮麗な建物は現代に継承され、大学校舎となっている。国登録有形文化財。



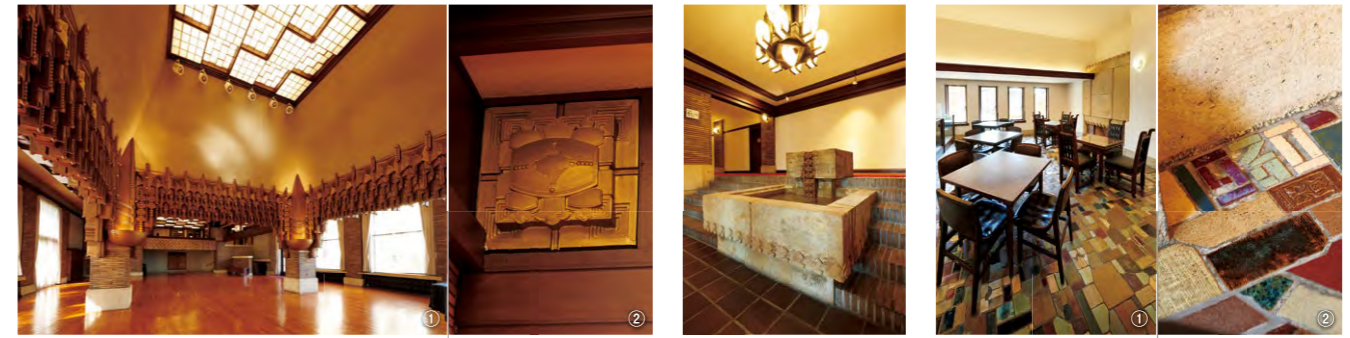
旧甲子園ホテル南側外観。水玉模様がある日華石の列柱や、幾何学模様の装飾タイルが日光を受けて影を作り、多彩な表情を見せる。



初代支配人・林 愛作は旧帝国ホテルの支配人を務め、新館の設計にライトを採用した人物。旧甲子園ホテルではその高弟である遠藤 新を起用した。



周辺の松林との調和を考え屋根に緑釉瓦を使った。庭園の池はかつて地域のかんがい用だったため、渇水時にはホテルが水を供給する取り決めがあった。



① 幻想的な装飾が施されたバンケットホール。水玉の意匠は建物を伝い池に至る水のイメージとも、防火の願いを込めたものともいわれる。② 打出の小槌の装飾。泉水には防火用水を貯める目的もあったとされる。③ 1階酒場。床のタイルは泰山製陶所で釉葉開発のために作られたもの。④ 竣工年を表したモザイク。

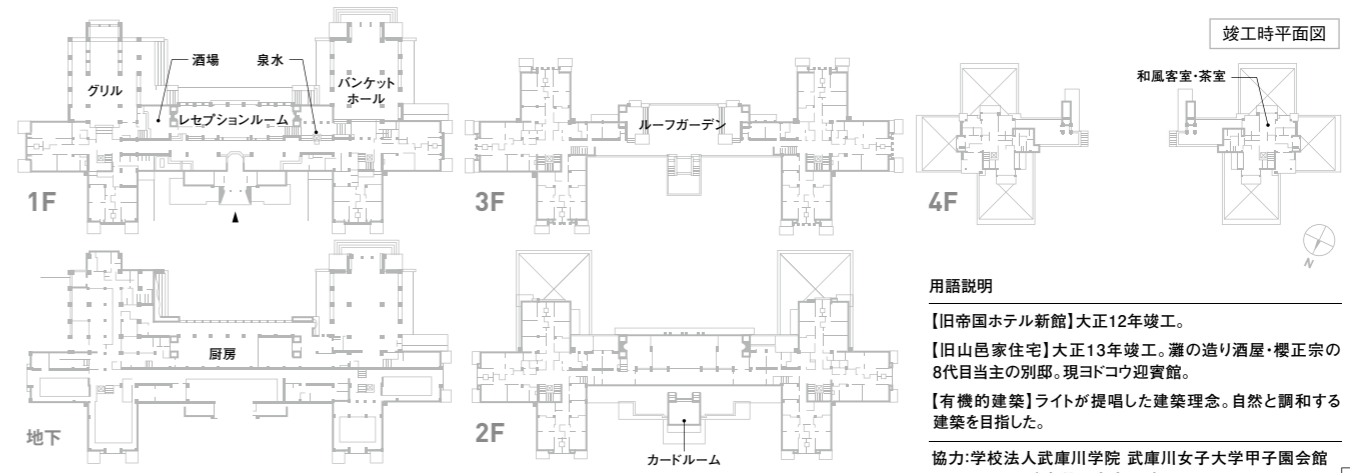


レセプションルーム(写真左)と東西の客室棟を結ぶ廊下。建物中央部をパブリックスペースとした。開業後、高松宮両殿下をはじめ、各界の著名人を多数、迎えた。① 半円形の窓がある2階カードルーム。② 1階グリル。現在は建築学科のスタジオ。③ 4階和風客室。奥は茶室。④ 和洋室の先駆けとなったスイートルーム(現存せず)。  
\*©武庫川女子大学甲子園会館

F.L.ライトが設計した東京の旧帝国ホテル新館や兵庫県の旧山邑<sup>むら</sup>家住宅は、大正11(1922)年に米国へ帰国したライトに代わって日本人が完成させた。それがライトの思想を継承する遠藤 新で、林愛作に登用され昭和5年に建築したのが旧甲子園ホテルである。ホテルは当時、阪神電鉄がリゾート地として大規模開発を進めていた武庫川河畔の景勝地に建てられた。幾何学模様のタイルや彫刻した日華石で美しく装飾された建物にはライトの建築手法との共通性がみられる。建物中央部は高さを抑え、張り出した軒によって

水平線を強調した造りである。建物左右の4階建て客室棟は各階が順にセットバックして3層の屋根が階段状となり、特に南側では緑釉瓦を葺いた屋根が庭園に向かって下るため、自然との連続性・調和を意識した「有機的建築」の表現を感じさせる。「ライト式」の建築手法が随所に見られる一方、バンケットホールの市松格子天井や、欄間に似た造作、方々に飾られた打出の小槌の意匠には日本的な趣がある。客室棟が頂く塔屋を七重塔に見立てることもできるという。計70室を擁する客室棟は十字型にしつらえ、

中心にエレベーターなどを集約して客の移動距離を短くした。厨房は地階にありながら敷地の高低差を利用した半地下であるため、採光に恵まれている。また、左右の客室棟を結び、各種配管を管理するトレンチを設置したことも当時としては先進的な特長である。昭和19年、ホテルは海軍病院に転用され、戦後は米軍将校宿舎となった。その後、昭和40年に大学の学舎になり、平成18年には女子大学初の建築学科が開設された。地域に学びの場も提供しており、こうした利用法は歴史的な建物の魅力を生かす好例として注目される。



【甲子園ホテル平面図】(遠藤現建築創作所所蔵)を元に作成

用語説明  
 【旧帝国ホテル新館】大正12年竣工。  
 【旧山邑家住宅】大正13年竣工。瀧の造り酒屋・櫻正宗の8代目当主の別邸。現ヨドコウ迎賓館。  
 【有機的建築】ライトが提唱した建築理念。自然と調和する建築を目指した。  
 協力:学校法人武庫川学院 武庫川女子大学甲子園会館 〒663-8121 兵庫県西宮市戸崎町1-13

